

対人関係に関する心理療法におけるプロジェクションの活用 How We Project Change of Personal Relationships on drawing?

三島 瑞穂†

Mizuho Mishima

†宇部フロンティア大学

Ube Frontier University

mishima@frontier-u.jp

概要

臨床心理学においてプロジェクションに最も近い概念は投影であるが、描画や刺激に対する言語反応への内的表象の投影に限られている。一方、認知科学では、認知的な働きの一つとして幅広くプロジェクションの研究が展開されている。認知科学の知見を臨床心理学に応用することで心の働きやメカニズムの理解が深まると考えられる。本研究では他者の視点と自己の視点を仮想的に交換することで心理的変容を促す心理療法を題材に、そこで成立しているプロジェクションについて検討する。

キーワード：対人関係表象(personal relationship image), 投射を伴う心理療法(therapy with projection), 投影描画法(projective drawing test)

1. 本研究の背景と目的

臨床心理学にはプロジェクションと類似する概念として、「ある対象に対する人の反応はその人の心理状態や傾向性を映し出したものである」という仮説に基づいた「投影」という概念がある。鈴木[16]はプロジェクションを「内的表象を世界に定位する心の働き」と定義したが、臨床心理学において投影とは「内的表象を成立せしめる認知機能の働きや人格が世界に定位する心の働き」を扱う[6]。投影法とは、顕在化された反応（描画や言語反応等）を通して物理的・生理的に測定できない心理状態や心理的な傾向、人格と認知機能の働き（以下、心的状態）を測ろうとする検査である。具体的には、樹木画を描くバウムテスト、川や山、道などを順に描いていく風景構成法、なぐり描きをするスクィグル法、家と木、人を描くHTPテスト、トラブルの場面の絵の吹き出しを完成させるP-Fスタディなどが開発されてきた[11]。

投影法は他の心理検査同様に、被検者の気分やその場の雰囲気、検査者との関係性に大きく影響を受ける。多くの検査者が心理検査で心がけることの一つに、被検者との信頼性の確保と、被検者に主体性を発揮してもらうことのバランスがある。鯨岡[7]は子供が主体性を十分に発揮し自己を表出するためには、養育者との相互主体的な関係性を作っておくことが不可欠であり、

その関係においてのみ間主観的に子どものことが「分かる」状態が成立することを示した。その上で鯨岡は間主観的に相手を理解することを、『あなた』の主観のある状態が『あなた』と『私』の『あいだ』を通して『私』の主観のなかに伝わってくる」と定義づけた。

心理検査において、自己と独立した客体として相手を捉えるのではなく、相手の視点を取得することを通して、相手の主観を自身の主観として体験している間主観的態度と、自身の主体性が相手との関係性の中で成立しており、そのことが互いに認知されている相互主体的な関係は極めて重要な要素である。しかし、相互主体性が成立する中で、被検者は検査者の主体性をも内的表象の中で体験しており、検査者の存在を強く認識している。検査者が被検者があるがままに捉えようとする検査において、「あるがままの被検者」には検査者からの影響も含まれている、というパラドックスが成立し、検査としての客観性が担保しづらいリスクを内包する。

筆者はこのパラドックスを解消する手法として、描画投影法と他者視点取得、視点変換を組み合わせた「検査者不在の相互主体的な関係上での投影法を体験するためのプログラム」を考案した[10]。

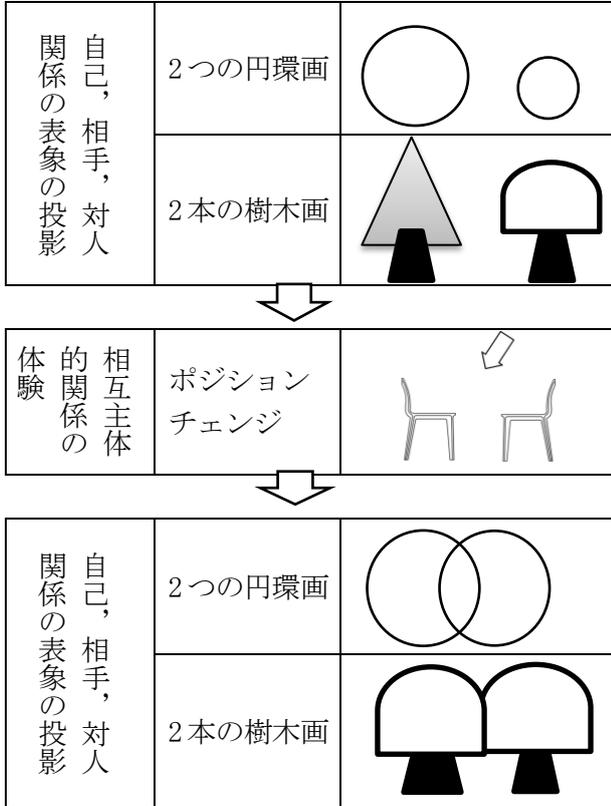
本稿では、プログラムにおけるプロジェクションがはたす働きについてより深く考察するとともに、実際にプログラム参加者がどのようなプロジェクションを体験したのかについて検討する。

2. プログラムの概要

Grinderの考案した「Getting Other Perspective (和名：ポジションチェンジ)」を用いた心理療法と筆者が考案した「2つの円環画・樹木画テスト」のプログラムを作成し、その量的・質的効果を検証した[9][10]。量的研究の結果については本稿最後の付録を参照されたい。以下はプログラムの概要である。プログラムは、関係性をより良くしたい相手に対して、視点変換と視

点取得を繰り返すことを通して、相手の表象や相手との関係表象を改善することを目的としており、表1はその手順である。

表1. プログラムの手順



使用した用具 八つ切りの画用紙, クレヨン, 色鉛筆, 鉛筆, 2脚の椅子.

関係イメージの対象 対人関係イメージの相手として、集団で実施する上での安全性を確保するため、①愛情を感じる、②トラブル等の問題がない等の条件に当てはまる他者を一人選ぶよう伝えた。他者視点変換と視点取得のワークに必要な第三者（メンター）として相手と自分が共に信頼できる人物または存在を選んでもらう。この存在によって関係性の悪化を防ぐ。相手とメンターは同席せず、ワークは参加者のイメージの中で行う。

投影描画法 2つの円環イメージ画と2本の樹木画を描いてもらう。それぞれ「自分を意識しながら、また相手を意識しながら、同じ用紙に1つずつ描いてください」と教示をする。円環イメージ画は自分と相手を円で表して、1枚の紙に描画するというものであり、2本の樹木画も自分と相手をそれぞれ樹木で1枚の紙に描画してもらうものである。この2種類の描画は次のポジションチェンジの前で2回行う。詳しくは後述

する。

ポジションチェンジ 表2のように、まず、自分のポジションでは相手が居ると想像し、次に、相手のポジションに視点を移動させて相手の視点から自分が居ると想像する。さらに、メンターのポジションに視点を移動させて、2人がいると想像する。この一連の流れを2巡する。詳しくは後述する。

表2. ポジションチェンジにおける指示内容

視点	指示
自分の ポジション	相手が居る様子を想像 (相手の表象を喚起)
	五感の確認 (どのように見えるか, など)
	情動の確認 (どのように感じるか, など)
相手の ポジション	相手になりきり, 自分が居る様子を想像 (自己の表象を喚起)
	五感の確認
	情動の確認
メンターの ポジション	目の前に2人が座っている様子を想像 (メンターになりきり, 2名の表象を喚起)
	五感の確認 (どのように見えるか, など)
	情動の確認 (どのように感じるか, など)
	それぞれに望むメッセージを送る

3. 描画投影法

このプログラムでは、相手の表象と自己の表象、その関係表象に対して2種類の描画投影法を用いている。一つが五十嵐の考案した円環イメージ画法と呼ばれる、円で人物の表象を表す描画投影法である[5]。五十嵐は大学生の親子関係の心理的な距離の表象が円環イメージ画において、大きさの相対的な違いと距離/重なり の程度に投影されることを示した。

もう一つが筆者の考案した2本の樹木画法で、対人関係における自己と相手それぞれを意識して2本の樹木を描いてもらう描画投影法である。1本の木を描くバウムテストでは、自己の人格や心的状態、認知機能の働き等を含む内的表象が投影されると考えられている[15]が、この2本の樹木画法はバウムテストと円環イメージ画法の両方の効果を併せ持つ2重の投影法を取り入れて考案した。自己と他者それぞれの表象が樹木画に、関係表象が円や樹木の特徴の差異、1枚の紙

の中の2つの円または樹木の距離に投影される。

図1は、ある女性の参加者が関係を難しく捉えていた息子を対象に、2本の樹木画と2つの円環イメージ画を行ったものである。図2は次に紹介するポジションチェンジのワークの後、息子に対する大きな心理的変容が起こり、描画にも表出されたものである。

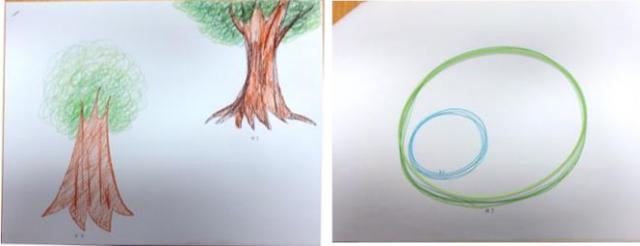


図1. ある参加者の息子（左）と自分



図2. 図1の関係イメージが変化した後の描画

4. ポジションチェンジにおけるプロジェクション

ポジションチェンジは Grinder[3]が考案した Getting Other Perspective と呼ばれる心理療法の日本語版である。図3のように椅子を用いて視点を設定し、仮想的に相手との関係を生成する。ポジションチェンジのワークでは相手やメンターになりきることで、その視点や主観を取得し、相手から捉える自分、自分から捉える相手、メンターから捉える自分と相手とその関係性を主体的に体験する。三島[10]はこのポジションチェンジにおいて仮想的に相手との相互主体性そのものを三者の立場で体験していることについて論じた。本研究ではプロジェクションの観点からポジションチェンジの本質を問い直す。

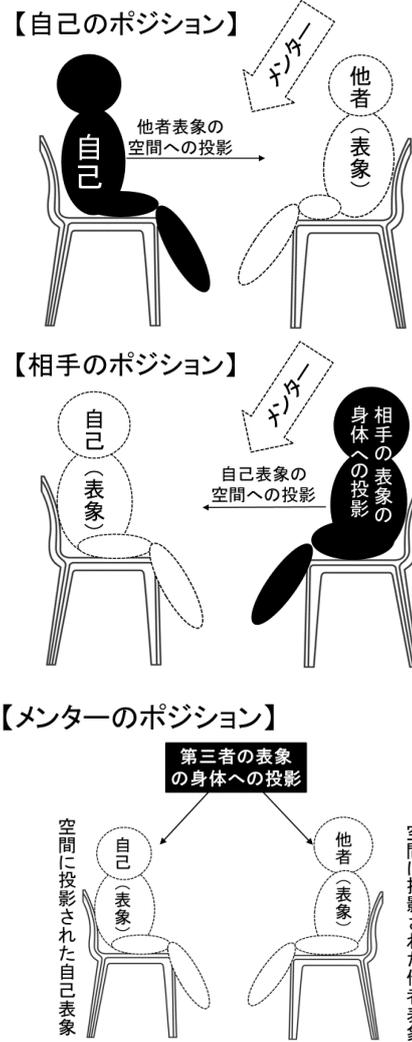


図3. ポジションチェンジ

具体的な技法としては、自己と相手のポジションに椅子を用意し、メンターのポジションには2つのポジションを見渡せる空間を用意する。距離などは参加者が設定する。自己以外は実在せず、「目の前に相手が居ることを想像することはできますか？どのように見えますか？何か話をしていますか？どのように感じますか？何か言ってあげたいことはありますか？」と問いかけて、無人の椅子に相手を喚起してもらう。その後、相手になりきって相手の椅子に座り、同様の問いかけで無人になった自分の椅子に自分が居ることを喚起してもらい、同様に問いかける。メンターのポジションでは無人の2つの椅子に自分と相手が居ることを喚起してもらって同様に問いかける。これを2回、繰り返す。

ワークにおいて対峙する相手やメンター、他者の視点から見た自分は、参加者が記憶や想像力などが作り出した内的表象、仮想的な存在である。

鈴木[14]は統合失調症による幻覚や Imaginary Companion のように、「ソースが物理的に存在しないのに、特定あるいは不特定のターゲットに対して行われる」投射を虚投射と呼んだ。他者を喚起して対話することは、物理的にはそこに存在しないが、記憶の中の他者表象の空間へのプロジェクションであり、虚投射と類似している。ただし、虚投射に意図は介入しないのに対して、ポジションチェンジにおけるプロジェクションは意図的なものであるため、仮想的な投影といえよう。ただし、虚投射とポジションチェンジは物理的に存在しないものの空間へのプロジェクションという意味で共通した認知的枠組みを持つと思われる。

ポジションチェンジでは意図的に相手やメンターなどの他者になりきり、その視点を取得する。相手の視点においては、相手になりきることで相手の表象を自分の身体に投影すると同時に、その相手の視点を通して自分自身の表象を空間に投影する。新たな視点の取得によって得られた自分に対する内的表象から、目の前の空間にさらに投影を重ねることとなる。メンターの視点においては、メンターになりきることで、その表象を自分の身体に投影すると同時に、その視点を通して自分と相手の表象を空間に投影する。相手や第三者になりきった上で、自己を想像する際には、2種類の投影が重ねられている。仮想的な相互主体的な関係性がポジションチェンジにおいて体験されるが、その体験はこの2種類の投影を反復することによって可能となる。

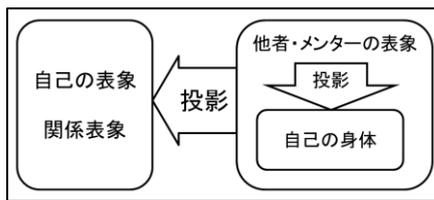


図 4. 他者・メンターの視点における 2 種類の投影

5. 具体的な事例からみた相互主体性とプロジェクション

ポジションチェンジにおいて、視点の転換と獲得、主体の交換を繰り返す中で、プロジェクションはどのような役割を担っていたのかについて、筆者が以前紹介した事例[10]を通して論じる。事例は、50代女性、元保育士である。医療従事者の夫と2人暮らしで長年飼っている犬がいる。プログラムにおいて、対人関係表象の改善を試みる相手は夫、メンターは飼い犬であ

る。以下はポジションチェンジ前に関する自由記述とインタビューのプロトコル(表2), および描画である。



図 5. 自分と夫の円環画と 2 本の樹木画(前半)

表 2-1 は、ポジションチェンジの前の関係に関するインタビュープロトコルと自由記述([])である。夫や第三者の視点を取得する前であり、自分の視点から見たという意味で自己中心的な夫婦の関係の表象が図 5 の描画に投影されているのみである。互いに干渉しないが並んでいる、という心理的な距離感が円の隙間に、対等な関係は円が同じ大きさであることに投影されている。行動のスタイルや性格の違い日常の関係性が喚起され、表象として浮かんでいると思われる。

表 2-1. 関係表象について (前半)

私と A(インタビューの夫の名前)の関係っていうのは同じ空間にいても個と個で、何か一緒にするっていうことは、あんまり思い浮かばないんですよ。私がどっちかっていうと、家に居るのが好き。A は外に出るのが好きで、出かける時に私来ないからと苦痛に感じることもないし、私も別に行くから羨ましいとかそういうことも全くなく。
[隣り合って立っている、また、並んで歩いている。どちらが上、前ということではなく、対等。1つの空間に個体として存在しているが、何かあれば、磁石のようにくっつき、解決すると、また離れ個に戻る。個として存在しているのだから並んでそこにあった。]

図4の樹木画と表2-2は、夫や第三者の視点を取得する前であり、記憶から想起された日常のままの自己中心的な視点から見た夫の表象が描画に投影されている。「合理的」「情に流されない」「自分の考えがしっかりある」夫の表象と「冷たい」「理想とは思わない」という感情が、強い先端（ギザギザ）に投影されていると思われる。一方、自分の樹木画には、自分のことをどのように意識しているか、「ぼわーんと」した自分の印象や性格の認知が内的表象として投影されていると思われる。

表 2-2. 描画について（前半）

A, こっちのギザギザがある方なんです。自分の考えがしっかりとあるので、強い先端を…。もう情に流されないっていったら変ですけど、職業柄、医療関係の仕事に就いているので、もう仕事は仕事でパツパツとして、引きずらない。多分、引きずっていたら仕事にならないっていうのもある。
 [空気のような存在。いても苦痛ではなく、いなくても不安にもならない。合理的で情に流されず職業上 ON/OFF の切り替えが上手だと思う。時々割り切りすぎて冷めたいと感じることもある。自分にはないものを持っているが、理想や、ああなりたいなどと思うことは全くない。]
 私は、前は保育士だったんですけど、園でも家に帰っても保育士なんです。私は何となく、きっちり考えずに何となく感覚で、ぼわーんとやってるので。ぼわーんと、ちょっとぼけたような色でって感じです。

図6～13は、ポジションチェンジの間に、それぞれの視点においてどのように内的表象が喚起されていたのかに関するプロトコルである。

1回目の自己の視点は、それまで意識していた通りの夫の内的表象が目の中の無人の椅子（空間）に投影されていると考えられる。そこでは他者の視点はない（図6）。

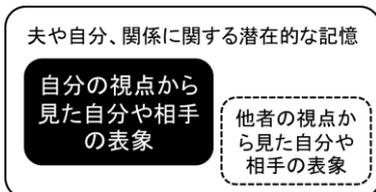


図 6. 最初の内的表象の状態

図7は、従来の自分の記憶にある夫の表象を投影している様子である。



存在は認めているんですけども、それが当たり前になっているので特に何か思うこともなく、あAだ、いるなあ。

図 7. 自分の視点から見た夫と内的表象（1回目）

1回目の夫の視点（図8）は、プログラムの中で初めて他者の視点を取得したものである。夫のポジションである椅子に座り、自分の身体に夫の表象を投影し、さらに自分の表象を自分のポジションである椅子に投影している状態である。さらに、自己の表象を空間に投影することで2つめの投影が重ねられている。



私、何かに集中すると、ずうっと終了までやっちゃたりするので、Aから見たら、ちょっと家事が、「あれえ？」な感じになったりする。聞きにくい、遠慮するのかな、とか。ちょっと家事頑張ってほしいな、とか。

図 8. 夫の視点から見た自分と内的表象（1回目）

このように、他者の視点を取得することにより、潜在的な記憶から、他者の視点から見た自分や相手、関係性に関する記憶が想起され、新たな内的表象が喚起されると思われる（図9）。

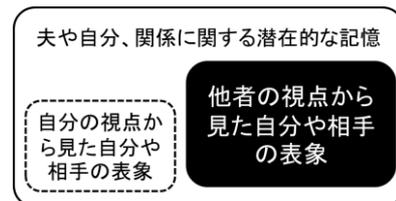
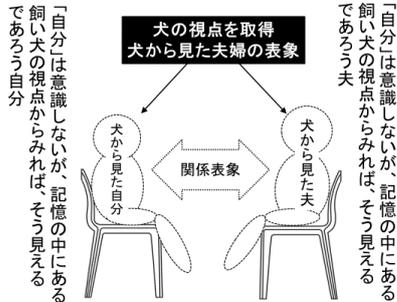


図 9. 他者の視点による内的表象の喚起

次に、メンターである飼い犬の視点から見た夫婦の表象では、飼い犬の表象を自分の身体に投影させた上で、飼い犬に関する内的表象が潜在的な記憶を想起することで夫婦の表象を喚起し、投影していると考えられる(図10)。三つ目の投影が重ねられたと言える。

【飼い犬の視点①】



自分に対しては、がんばってるね、っていう声をかけて。家事もできる限りやってるつもりでもあるし、勉強の方もまあ何とかやってる、頑張ってるねえって言って。Aに関しては、特にない。

図10. 飼い犬の視点から見た自分と内的表象(1回目)

次に2回のポジションチェンジでは、他者の視点が入ることでより多くの潜在的な記憶が想起され、内的表象が更新されると考えられる(図11)。またもう一度自分の視点に戻るにより、他者の視点と自分の視点、両方の視点から記憶を想起し、内的表象を喚起すると思われる。

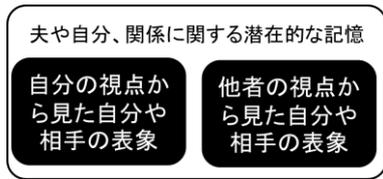
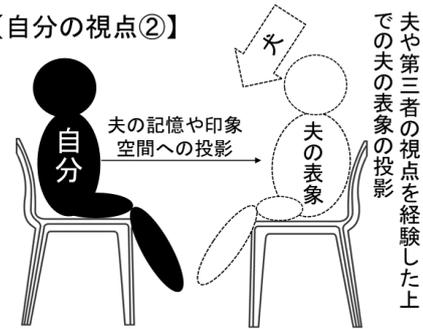


図11. 自分と他者、両方の視点による内的表象の喚起

2回目に自分の視点から夫を捉えた際には、既に夫と飼い犬の視点を取得し、それまで意識にのぼらなかった記憶が内的表象に含まれている(図12)。協力してくれたという記憶や大変だったのかもしれないという気づきが夫の表象の投影に加わっている。

【自分の視点②】



プロトコル「いっぱい協力をしてくれて、当たり前になってたんですけど、忙しい中でやってくれてるから『ありがとう』って。あと全然大変そうなところを見せないけど、ほんとはすごく、大変なことを抱えてるのかなあって思ったり。「気づかんでごめんね、今までありがとうね」っていう感じで。優しい気持ちがわいてきた。

図12. 自分の視点から見た相手と内的表象(2回目)

さらに2回目の夫の視点からは、1回目で表出されていた、夫が抱えていると思っていた不満が消えている。1回目の夫の視点からの自分に対する内的表象は、夫は自分のことをこう思っているに違いない、という思い込みからきたものである。夫や第三者の視点を介することで、そうではないことに気づくことで投影される内的表象も変化したと思われる(図13)。

【夫の視点②】

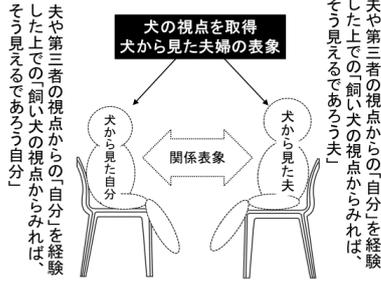


あんまり(具体的に)思わなかったかな。「頑張ってるねえ」っていう感じで。自然に。

図13 夫の視点から見た自分と内的表象

2回目の飼い犬の視点においても、より多くの潜在的な記憶が想起された状態で夫の視点を自己の身体に投影し、またその記憶が自分や夫婦の表象に反映され、それぞれのポジションへの投影が成立していると思われる(図14)。

【飼い犬の視点②】



私の方が A に対しての意識が変わったから、その感謝の気持ちを伝えたらいいよ。A に対しては、感謝してるっていう気持ちが伝わることで、もしかしたらちょっと手伝ってほしいことがあったら言いやすくなるかもしれないよ、よくなるっていいね。

図 14. 飼い犬の視点から見た自分と内的表象(2回目)

次の表 3 はポジションチェンジ終了後の 2 本の樹木画と円環イメージ画、その体験に関するプロトコルと自由記述である。後半のインタビューでは、潜在的に持っていた夫の表象と、その関係表象が顕在化し、そのことが樹木画と円環画とその変容に投影されていたことが明らかになった。

夫や夫婦の関係を投影し、また自己の身体に夫や飼い犬の表象を投影することを通して、喚起される内的表象が大きく変化した。その結果、「A がいるから自由にできている」「2 人でトラブルを解決したり」「何かあったときに相談しながら」「バカさ加減は完全に一致」など、強い結びつきが喚起された。

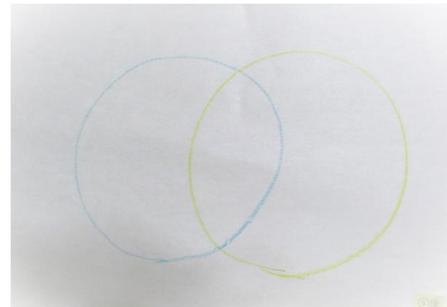
表 3-1. 後半の関係表象について

ちょっと見る目が優しくなったかな。今までは、別々で、一人でやってきたつもりだったんですけど、実は A がいるから自由にできてるのがあるのかなって感じ。すごく、役に立ったというか、気づかせてもらったというか。やってもどうせ変わらない、と思ったんですけど、やってみたら変わりました。今まで 2 つって考えてたんですけど、別々であっても 2 人で協力してトラブルを解決したりとか、何かあったときに相談しながら、やったりするので、別々であっても一個で・・・

ポジションチェンジのワークが終了しても、その内的表象は変わらず、樹木画と円環イメージ画の両方に投影されていた。夫や自分たちの関係性を喚起する際には、ポジションチェンジで重ねて行った投影を通して獲得した表象が残ったと考えられる(図 15, 表 3-2)



後半: 自分(左)と夫(右)の表象



後半: 自分(左)と夫(右)の表象

図 15. 自分と夫の円環画と 2 本の樹木画(後半)

表 3-2. 後半の関係表象について

実は 2 本で 1 本の木だったのかもしれないと思った。木の幹は 2 本あって別々ではあるんだけど、1 つ、というのを思い出しました。

2 本の樹木画と同様に、視点と自己の身体への投影を重ねたことで、相手の主体性を体験し、相互の思いに関する新たな理解が生まれ、助け合い支え合っている関係の顕在化が円の重なりで投影されたと考えられる(表 3-3)。

表 3-3. 後半の描画について

2 つの円がクロスして、重なりが出て、個と個ではあるんですけど、A に助けられている点はあるし、私も助けてあげているっていったら、ちょっとあれですけど、お互いに支えあっているなっていう部分があつて。
[仕事の大変さや家事の分担など協力してくれていることに気づき、2 つの円がクロスした。最初は並んでいたが、相手も大変なのに、それを見せていないだけかもしれない。個として存在していると思っていたが、実は 2 本で 1 本の木だったのかもしれないと思った。特にバカさ加減は完全に一致している。よって木は 2 本で 1 本になった。]

ポジションチェンジでは 2 回の視点変換と視点取得によって、次のような表象と投影の変化が生じる

と考えられる。まず、図 16 のように、1 回目の自分のポジションでは、自己中心的な視点で、相手の表象を椅子に投影している。次に 1 回目の相手のポジションでは、相手の視点で自分の表象を投影している。この時点で自分の視点と相手の視点の調整や統合はまだできていない。相手の表象を自分の身体に投影する際に「相手はこう思っているに違いない」と、相手からの自己中心的な視点が残る。メンターの視点において、第三者の表象を自己の身体に投影することで、相手と自分それぞれの自己中心性から逃れる。より広い視野で潜在的な記憶を用いることができるようになる。また、メンターは両者から信頼できる者を選ぶため、関係性の悪化や心理的に不安定になることを防ぐ役割もある。

そして、2 回目の自分のポジションでは、図 17 のように、自己中心的な枠組みから逃れることで、より広い視野で相手の表象を投影している。2 回目の相手のポジションでも、自己中心的な枠組みから逃れて自由に潜在的な記憶を用いることで、相手の表象を自己の身体に投影する際には、より多くの記憶を想起している。自分を多角的に見た上で、自己の表象を自分のポジションに投影する。最後に、メンターのポジションでもう一度、自分と相手の関係の表象の変化を投影することで関係性の変容を確認し、より強固なものとする。

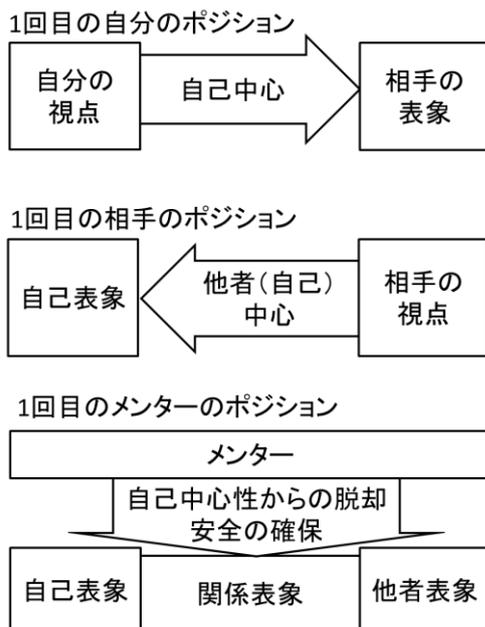


図 16. 1 回目のポジションチェンジによる変化

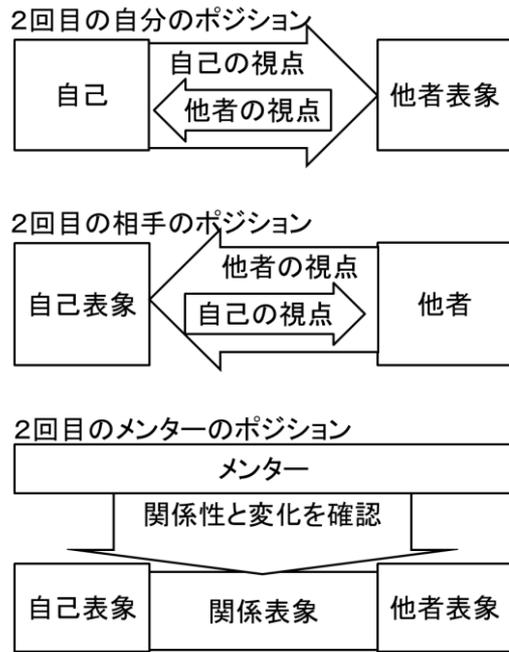


図 17. 2 回目のポジションチェンジによる変化

文献

- [1] Ave-Lallemant, U. (1994) Baum-Test. Ernst Reinhardt Verlag, Munchen. (渡辺直樹・野口克己・坂本堯 訳 (2002) バウムテスト—自己を語る木：その解釈と診断。川島書店)
- [2] Bolander, Karen (1977). Assessing Personality Through Tree Drawing. By Basic Books Inc. (『樹木画によるパーソナリティの理解』高橋依子訳, ナカニシヤ出版)
- [3] Grinder, John & DeLozier, Judith (1995). Turtles All the Way Down Prerequisites to Personal Genius. John Grinder and Judith DeLozier Editorial and Art Direction
- [4] Hammer, E. F. (1958). The Clinical Application of Projecting Drawings. Springfield, Ill.: C.C.Thomas.
- [5] 五十嵐哲也 (2009). 円環イメージ画にあらわれる大学生の親子関係表象, 58 (教育科学編), pp51-59, 愛知県教育大学研究報告
- [6] Koch, Charles (1952). The Tree Test. Bern: Huns Huber. (『バウム・テスト—樹木による人格診断法』林勝造・国吉政一・一谷訳, 誠信書房)
- [7] 鯨岡峻 (2006). ひとがひとをわかるということ—主観性と相互主体性. ミネルヴァ出版
- [8] 雲井小夜子 (2019). 妊娠・出産に伴う母親の心理発達—「自己に対する満足度」との関連と円環イメージ画に表れる変化—, 宇部フロンティア大学大学院附属臨床心理相談センター紀要. 第 15 巻, pp59-68
- [9] 三島瑞穂 (2016). 投影描画法による対人関係イメージの変容の視覚化, 電子情報通信学会 HCG シンポジウム.
- [10] 三島瑞穂 (2019). 検査者不在の相互主体的な関係上での投影法, 認知科学 Vol.26 No. 1, pp152-167.
- [11] 中井 久夫 (1984). 精神医学の経験 1 巻分裂病, 岩崎学術出版社
- [12] Pearls, Frederick S (1992). Gestalt Therapy Verbatim. The gestalt journal press, Inc.
- [13] 酒木 保 (2017). ロールシャッハ法の豊かな多様性を臨床

- に生かす—1 症例をめぐってのさまざまなアプローチから. 氏原寛・森田美祢子編 金子書房 pp121-140.
 [14] 高橋恵子(2010). 人間関係の心理学—愛情のネットワークの生涯発達, 東京大学出版会.
 [15] 高橋雅春・高橋依子(1986)樹木画テスト. 文教書院
 [16] 鈴木宏昭 (2016). プロジェクション科学の展望. 日本認知科学会第33 回大会.

付録一ポジションチェンジと投影法の量的分析

投影法の描画のほとんどが質的に分析されるが, 円環イメージ画とそれに類する 2 本の樹木画には, 数値化が可能な部分があると思われた. 以下は三島[9]で検討したデータと分析結果の再掲である.

地方短期大学学生 43 名 (女性 38 名, 男性 5 名) に対して, ポジションチェンジで関係イメージの変容を促した. 関係イメージの対象には「よい関係を作りたい大切な相手」 を選ぶよう伝えた. 自分と相手にとって素直になれる尊敬する第三者をメンターとして選ぶように伝えた.

2 本の樹木の描画投影法, および円環イメージ画では「自分にとって大切な相手を一人思い浮かべてください. 自分と相手, それぞれを意識しながら, 1 本ずつ樹木を (一つずつ円を) 描いてください」と伝えた. 描画のデータとして, 円の大きさ, 距離, 樹木の樹冠の大きさ, 幹の中心間距離を数値化したものを用いた.

高橋[14]の愛着関係尺度を元に愛着機能尺度を作成し, プログラム前後の心理的変容, および描画の変化との関連を検討した. 愛着機能尺度とは高橋の愛着関係尺度をベースにした 15 項目からなる尺度であり, 大切に思う他者に対する愛情の強さなどを測るものである. 表 2.3 はそれぞれプログラム前後の愛着機能尺度のデータの因子分析 (主因子法, Promax 回転) の結果である. 固有値の減衰状況から 2 因子が想定され, それぞれ項目内容から, 応援期待因子, 心の抛り所因子と名付けた. プログラム前後でいずれも同様の因子構造, 下位尺度を示していた. それぞれの信頼性係数 (Cronbach' α) を調べたところ, プログラムの前では, 応援期待因子が.881 心の抛り所因子が.787, プログラムの後ではそれぞれ, 応援期待因子が.877, 心の抛り所因子が.776 であり, ある程度の信頼性が得られた.

下位尺度得点を下位尺度のデータの平均値とした.

前半と後半それぞれの 2 因子の下位尺度得点の間の差を t 検定で検討した結果, いずれも有意な差がみられ (応援期待因子; $t=2.59, df=42, p < .05$; 心のよりどこ

ろ因子; $t=3.72, df= 42, p < .001$), プログラム後に相手に対する感情が好転していた. 円環イメージ画の量的指標として, 円の接し方のタイプを数値化したもの, 樹木画では樹冠の接し方のタイプを数値化したもの, 幹の中心間距離を用いた. 分析方法は, 心の抛り所因子と応援期待因子を独立変数, 幹の中心間距離, 幹の位置関係, 円環の位置関係を従属変数として重回帰分析を行った.

前半, 重回帰分析を行ったところ, 円環の位置関係のみ, 10%水準で有意な結果がみられた(図 18). 後半の樹木と円環の接し方に関して下記のような有意な結果が得られた. 幹の中心間距離に関しては, 前半と後半いずれも共線性が強く出たため, 結果から除外した.

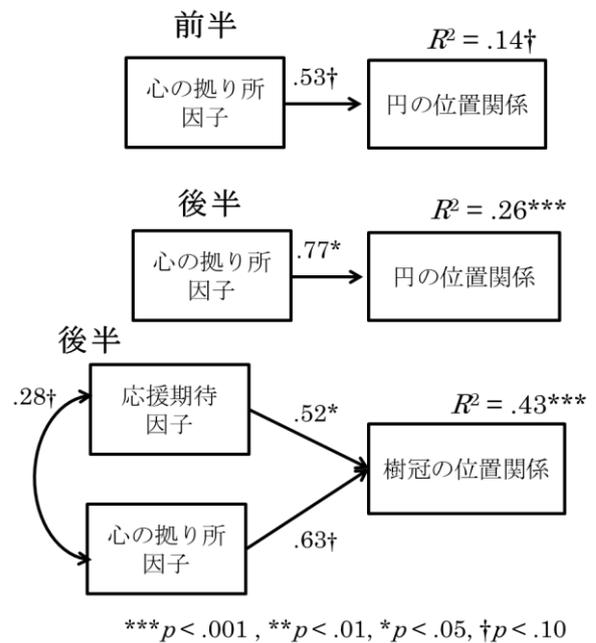


図 18. 樹木と愛着機能の関係

次に, 因子と描画の特徴の間で相関分析を行ったところ, 前半には, 2 因子と幹の中心間距離に負の相関, 円の接し方と幹の中心間距離に比較的強い負の相関, 円の接し方と樹冠の接し方のパターンに正の相関が見られた. それに対して後半では, 心の抛り所因子は, 円の接し方, 幹の中心間距離, 樹冠の接し方と相関を見せた. 応援期待因子は, 樹冠の接し方とのみ正の相関が見られた.

表 4. 因子とイメージ画の指標の間の相関関係
(ポジションチェンジ前：左下，後：右上)

	応援期待因子	心の拠り所因子	木の位置関係	幹の中心間距離	円の位置関係
応援期待因子	—	.38*	.39*	.21	.39*
心の拠り所因子	.32*	—	.51**	.14	.39*
木の位置関係	.07	.05	—	.61**	.60**
幹の中心間距離	.56**	.17	.62**	—	.84***
円の位置関係	.29	.12	.29	.58**	—

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

まず、円環の位置関係は心の拠り所という情緒的側面を表していた。樹冠の位置関係はポジションチェンジ後に、心の拠り所因子、応援期待因子、両方と、かなり強い関連が見られた。主体性を前提とする応援期待の側面はポジションチェンジを通して促進された様子が見られた。ポジションチェンジによる変容を、円環イメージ画と樹木画によって、ある程度、推測できたのではないかと考えられる。ただし、今回の研究では「大切な相手」を設定し、愛情を要求する限定的な側面にのみ焦点あてられていたが、大切な相手がそのような関係とは限らない。自由記述からは、守りたい相手などの慈しむ相手や、対等の友人関係なども見られた。